採集報告

中房温泉及燕岳の蝶（鳥居正名）：7月上中旬に過去數回同地で採集を行ひ，面白いと思つた種類を例擧すると：**ウラキンシジミ**（高瀬川畔），**ウスイロオナガシジミ**（中房温泉），**オホイチモンジ**（信濃坂），**クモマツマキチヨウ**（燕岳頂上），**タカネヒカゲ**（燕岳），**ヤマモンキチヨウ**（燕岳），他に，採集はし得なかつたが**ダイセンシジミ**を信濃坂で岡田慶夫が確實に目撃してゐる．

一ノ澤の蝶（岡田慶夫）：北アルプス常念岳から東流する澤であるが，過去數度の經驗によると相當蝶が多い．特に8月中旬に**ベニヒカゲ，クモマベニヒカゲ，オーゴマシジミ，コヒオドシ**が，又下旬には**エルタテハ，キベリタテハ**等が多い様である．ミドリシジミ類としては**エゾ，ジョーザン，メスアカ，アイノミドリシジミ**が採れたが7月中下旬でないと新鮮なものは望めない．道が良く採集地としては惠まれてゐるが餘り知られてゐないようだ．

中國山脈のスギタニルリシジミ（岡垣弘）：中國山脈の穗ノ見ケ山塊の麓の大井部落路上で私は1945年5月25日本種1♂を捕えた．翌年竹内亮氏も同部落の茶の花で5月14日1♂を採集，他にもそれらしいものを見られた．本種は中國山脈中に點々と分布し，適當な時に行けばかなり採集されるものと思う．何れも古い個體だが，裏面の白い九州產亞種とは逆に京都のものより黑いようで，交尾器も京都のものと多少差がある．尙同地方には黃化傾向のある**ウスバシロテフ**を產し，中國地方には非常に少い**シータテハ**を竹内氏は1946年5月14日に採集してゐる．

京都北山のウスイロオナガシジミ（河端政一）：本種は從來比良山より數頭採集され，更に芦生京大演習林より1947年に採集された．私は1948年7月7日京都市よりあまり遠くない尾越京都三中山小舍附近で本種一頭を得た．

ヒサマツミドリシジミの採集記錄（岡田慶夫）：滋賀縣比良山や京都北山からは每年數頭づつ採集されてゐるが，個體數は年によつてかなり變化がある．場所的に♂と♀は住み分けの様な現象が見られる．寺義文雄氏（近江博物同好會誌，第11號，1941；Zephyrus, vol. 9, 1947）は伊吹山附近で本種を採集されたが，京都某氏は三重縣御在所山で**キリシマミドリシジミ**を採集中本種1頭を採集された．

シルヴイアシジミ京都市内に產す（石田誠治）：本種は京都附近では大阪府高槻市に於て採集されたが，最近京都市南端の中書島でも相當發生する事が知られた．

最近のキマダラルリツバメ採集記錄（鳥居正名）：本種を京都市内で最初に採集した人は酒井寅次郎氏（1938）との事だが，其後市内各地で採集される樣になつた．ところが1948年府下福知山市及宮津市で本種が發見されたことが新聞に報ぜられて注目された．（宮津では數年前すでに數頭採集されたと聞いてゐる）尙以前より屢々採集されてゐるが，私も大山に於て本種1♀を採集した．

比叡山の蛾採集（岡田慶夫）：京福電鐵ではケーブル四明嶽驛や蛇ケ池遊園地にサーチライトを備え，一般の夜間採集に便宜を圖つてゐるので數回採集を行つた．大型のもので面白いと思つたのは**ホソバスズメ・キオビドクガ・ムラサキシタバ**等があつた．八瀨博物館の今井氏，京大の三浦氏をはじめ京都の同好者が每年同山に採集されてゐるので次第に精しい結果が發表されると思う．

海外雜錄

The Lepidopterists' News：前に日本へ進駐して來たC. L. Remington氏は1947年5月にThe Lepidopterists' Societyを結成し，上記のNewsletterを每月發行してゐる．内容は文献紹介・評論・會員よりの通信等豐富である．每號12頁位．

La Société Lepidopterologique de Genéve：1945年40周年を迎え，La Societé Entmologique de Genéve と改名し，一般昆虫學の學會に發展．

歐洲に於ける戰災：全壞したコレクションはハンブルク博物館其他數ケ所．ドレスデン博物館は部分的に損傷 ケーニツヒ・ボン・ウィーン・ベルリン等の大部分の博物館は建物は破壞されたものもあるが，コレクションは疎開などをしてゐたためほとんど安全に保存されてゐるとの事．併しソヴイエツト下にある地帶の損害はかなり大きいらしい．尙同地にあるForster博士は健在であるとのこと．

命名法に關する一試案：ベルギーのS. G. Kiriakoffの數回にわたるLepidopterists' News

への投稿によると，彼は學名は分類學の範疇に屬するもののみに與えらるべきであり，又分類學は元來生物學の一部門であるからあらゆる生物學の分野を考慮して分類をせねばならぬとゆう立場より出發し，種やそれ以下の單位を更に合理的に表はす命名法を提唱してゐる．即ち Intraspecific categories に屬するものと，Circumspecific categories に屬するものとに分け，更に前者を Geographical race, Ecological race, Cytological race, Micro-race, Cline に分け，後者を Species proper, Semi-species, Ultra-species に分ける．そして夫々を示す記號を學名に附して性質を示すのである．要するに形式的な現在の學名に詳細な性質を示す記號を附して系統分類的な色彩を與へんとするものであると言えよう．

Some Principles of classification in Lepidoptera, with special reference to the butterflies：B. C. S. Warren が The Entomologist, vol. 80 (1947) に發表した論文で，種々の分類標徵の價値の輕重を考察し，蝶を系統的に分類したものである．それによると蝶は次の樣に分類される．

Suborder　Heteroneura
　Super-family　Group　I
　Super-family　Group　II
　　Superfamily　Hesperioidea…………Hesperiidae.
　　Superfamily　Papilionoidea
　　　(A)　Primitive　family-group…………Papilionidae, Pieridae, Lycaenidae.
　　　(B)　Advanced　family-group…………Riodinidae, Libytheidae.
　　　(C)　Specialized　family-group…………Nymphalidae, Satyridae.

Classification of the Butterflies, with the Allocation of the Genera occuring in North America North of Mexico：Austin H. Clark が Proc. Biol. Soc. Washington, vol. 61, pp. 77－84, 1948 に發表したもので，多くの人々の研究を綜合した結果の分類表である．種々の點から現在の分類の一標準をなすと言へる．彼は Papilionoidea を Papiliones, Lycaenae, Nymphalides に分つてゐる．我々の關心の深い Lycaeninae は次の樣に分けられてゐる．

Theclini { Theclina (Zephyrus, Thecla, Strymon etc.)
　　　　　Eumaeina (Eumaeus)
Lycaenini { Lycaena (Lycaena, Tharsalea)
　　　　　Plebejina (Zizera, Everes, Plebejus. etc.)

Argynninae の分類；C. F. dos Passos & L. P. Grey：A genitalic survey of Argynninae (Amer. Mus. Nov., no. 1296, 1945) によると新北區の Argynnis は舊北區のものと區別され，Speyeria をその屬名とすべきであるとゆう．舊北區のものについては詳細な檢討はしてゐないが，兩氏が論文作成中に B. C. S. Warren：Review of the classification of the Argynnidi：with a systematic revision of the genus Boloria. (Tran. Roy. Ent. Soc. Lond., vol. 94, 1944) を發表してゐる．そして兩者の結果は大體一致してゐる樣だ（後者は100頁46圖版の大著だが未だ見てゐない），彼等は舊北の Argynninae を Boloria, Brenthis, Argynnis の 3 屬に分つてゐる．Boloria にはアサヒヒヨウモン等小形のもの，Brenthis にはコヒヨウモン・ナミヒヨウモンのみ，Argynnis には大形のヒヨウモン類が屬する．

翅の色素とその變化：蝶の色彩の地理的變化について大分前だが W. Hovanitz (Ecology, vol. 22, no. 3, 1941) に面白い論文を發表し，其後も同樣の研究をしてゐる樣である．上記論文に依るとカリフオルニアを中心としたアメリカ西海岸は氣候的に種々の型に分けられ，これと蝶の斑紋變化の關係は：一斑紋の色素を第 I 群（黑色のメラニン系），第 II 群（タテハ等の地色をなす赤，褐，黃色系色素），第 III 群（アゲハ・シロチヨウ等の地色をなす黃・オレンヂのプテリン系色素）と分けると，低温・高濕・多雨で日光輻射量の少い土地では第I群は面積・强さ共に增し，第 II 群は强さを增し面積は增すか又は減る．第 III 群は明るい色の廣さを增す．かゝる事實は一群の蝶で平行現象を示し，一種の適應と考へられる．最近化學的な立場から E. B. Ford (Proc. Roy. Ent. Soc. Lond. (A), vol. 22, pp. 72－76, 1947) はプリテリンの檢出反應を考案してゐる．

The Origin and History of the British Macro-Lepidoptera：B. P. Beirne が Trans. Roy. Ent. Soc. Lond., vol. 98, pp. 273－372, 1947. に發表したもので，英國の現在の macrolepidoptera は移住によるもので，12 萬年迄溯つて考へ，前後 6 回の氣候變化による移住でその大體が形成されたことを述べ，更に鱗翅類の種の形成には約12萬年，亞種の形成には約 5 萬年を要することを論じてゐる．この樣な研究は我國でも望まれるところで，白水氏（松虫，Vol. 2, No.1, 1947）の强調される系統生物地理的方法も同樣な傾向と思はれる．